

ある儒者の幕末

—— 菊池三溪伝小致 ——

福井辰彦

一

千年を越える長い歴史を積み重ねた我が国の漢文学は、幕末から明治のはじめにかけて爛熟期を迎えた。それはまもなく西洋由来の〈近代文学〉に追いやられ、滅びてゆくことになるこの文学様式が見せた、いわば落日の輝きであった。

菊池三溪は、この日本漢詩文最後の隆盛の中で活躍した人物である。彼のものした詩文、ことにその漢文小説は多くの読者を獲得した。

たとえば、森鷗外『ヰタ・セクスアリス』（『昂』第七号（明治四十二年（一九〇九）七月））には、主人公金井湛十四才のときのこととして次のような一節が見られる。

裔一は平べつたい顔の黄いろ味を帯びた、しんねりむつりした少年で、漢学が好く出来る。菊池三溪を鼻屑にして居る。僕は裔一に借りて、晴雪樓詩鈔を読む。本朝虞初新誌を

読む。それから三溪のものが出るからといふので、僕も浅草へ行つて、花月新誌を買つて来て読む。二人で詩を作つて見る。漢文の小品を書いて見る。先づそんな事をして遊ぶのである。

（中略）

裔一の母親は継母である。ある時裔一と一しよに晴雪樓詩鈔を読んでゐると、真間の手古奈の事を詠じた詩があつた。僕は、ふいと思ひ出して、「君のお母様は本当でないさうだが、寤めはしないか」と問うた。「いいや、寤めはしない」と云つたが、彼は母親の事を話すのを嫌ふやうであつた。

「晴雪樓詩鈔」は慶應三年（一八六七）に刊行された三溪の別集、「真間の手古奈の事を詠じた詩」は同書所収の「継橋歌」を指す。「本朝虞初新誌」は明治十六年（一八八三）に刊行された三溪の漢文小説集である。周知の通り『ヰタ・セクスアリス』は自伝的要素の強い作品であるが、自伝そのものではなく、多くの潤色や

虚構を含む。右の引用箇所も例外ではない。作中、明治四年の廢藩置県が金井六歳のときのこととされているから、右の引用箇所は明治十二年のこととなるが、文久二年（一八六二）生まれの鷗外はこの年既に十八歳、『本朝虞初新誌』もこの時点では出版されていない。したがって、この記述をそのまま鷗外にあってはめることには慎重であらねばなるまい。しかし、青少年期の鷗外が菊池三溪の詩文を愛読したこと自体を虚構とすべき理由はない。少なくとも当時の若者たちがこのような形で三溪の作品を享受していたことは確かであろう。

永井荷風もまた三溪の詩文を愛した一人であった。晩年の文章に次のように記している。

（補記） 友人森銑三氏はわたくしの此稿を「雑誌人間」の

誌上で一読せられ菊池三溪が梅暦中の一節を漢文に訳した写本を携へてわたくしを訪はれ教へらるゝ所があつた。三溪の文は江戸稗史家の小説を漢文に訳した訳準綺語中の一章で、雨夜赤繩と題せられ、梅暦の發端惠の花の一節、お糸半次郎が押れそめのくだりである。

（中略）

菊池三溪は紀州徳川氏の儒臣で、文久年代には成嶋柳北の後を承けて幕府の奥儒者となつた。明治時代には依田学海と並んで風流詩文の名家中に数へられた。詩集には東京写真鏡、文集には虞初新誌等がある。今座右に

参考書がないので多く言ふことができないが、三溪の詩文はわたくしの常に愛誦して擱かざるもの。わたくしは森銑三氏の厚意を永く忘れぬであらう。

右は「為永春水」が「罹災日記」（扶桑書房 一九四七）に収められた際加えられた補記である。末尾には「昭和二十一年六月補記」と記す。「訳準綺語」はその一部が三溪の死後、明治四十四年（一九一）に出版されるが、刊本未収の作品も数点存在する。森銑三が荷風に示した「雨夜赤繩」もその一つである。文中荷風は三溪を「依田学海と並んで風流詩文の名家中に数へられた」と評価し、「三溪の詩文はわたくしの常に愛誦して擱かざるもの」だとまで述べている。

これら二つの事例を見ても、三溪が文学史上無視し得ない存在であることは明らかであろう。

しかし、三溪についての先行研究は極めて少ない。その中で伝記研究と呼べるものは、富村登「常総の漢詩人」（富村登遺稿出版後援会 一九六五）があるのみである。また三溪の自筆稿本および旧蔵書は、現在京都大学付属図書館に所蔵されている（自筆稿本は貴重書指定）。明治三十三年十二月京都帝国大学図書館に三溪の養子菊池左馬太郎⁵によって寄贈されたものである。このうち自筆稿本は、三溪の生涯と文学の全貌を明らかにするために最も重要な一次資料となるはずである。さらに自筆稿本には三溪の師友たちによる批点・評語が大量に書き込まれており、より広

く当時の学問・文学の動静を知る上でも資料的価値は高い。だが、これについても日野龍夫「菊池三溪自筆詩文稿」(『国語国文』四六一九 一九七七・九、のち日野龍夫著作集第三卷『近世文学史』(ぺりかん社 二〇〇五) 所収)が簡単な紹介をしているだけで、資料の全体像を明らかにする詳細な調査は行われていなかった。

こうした研究状況を踏まえ、論者は平成十九年度、日本学術振興会特別研究員として三溪自筆稿本の悉皆調査を行った(研究課題「菊池三溪自筆稿本類の調査整理に基づく三溪および明治漢詩文研究の基盤形成」)。本稿はその成果をも活用しつつ、三溪伝記の一端を明らかにしようとするものである。

二

改めて菊池三溪の略歴を確認しておこう。

菊池三溪。名は純、字は子顕。三溪のほか、晴雪楼主人、鉄屏書屋主人などとも号した。文政二年(一八一九)、紀州和歌山藩の儒者菊池梅軒の子として生まれる。菊池家は三溪の曾祖父衡岳以来代々儒を以て仕え、藩政にも参画した。三溪も幼時より儒者たるべく教育を受け、和歌山藩儒となる。安政五年(一八五八)に藩主徳川慶福が十四代將軍に就任した後、將軍侍講となるが、やがてこれを辞し、采地である下総国結城郡宗道村に退隠した。その後常総各地を転々としたが、その間下館、笠間、土浦の各藩に相次いで聘せられ、これに応じている。明治四年(一八七二)

春東京へ出た後、五年六月京都に移った。京都でもたびたび転居を繰り返している。十四年には東京に戻り、警視庁御用掛を勤め、十六年には大阪に移り、大阪府中学一等教諭となった。明治二十一年までには再び京都に移っている。明治二十四年十月十七日若狭國小浜で没す。七十三歳。主な著書には既に挙げた『晴雪楼詩鈔』『本朝虞初新誌』『訛準綺語』のほか、『東京写真鏡』(明治七年刊)、『西京伝新記』(明治七年刊)などがある。

このような三溪の生涯の中で、最も大きな転機となったと思われる出来事は、幕府致仕である。儒者の家に生まれ、期待通り学問を修め藩儒になったばかりでなく、たまたま藩主慶福が將軍職を継いだことにより將軍侍講にまで至った彼の前半生は、極めて順調で幸運なものであった。しかしまもなくかれは野に下り、常総地方に退いてしまう。その後は、幾つかの藩や明治政府に出仕することはあったが、以前のような輝かしい地位を得ることはなく、むしろ文人として生きてゆくこととなる。同じく將軍侍講を務め、幕府瓦解後は新聞人として活躍した成島柳北の人生を髣髴とさせるような激しい転変である。

しかし、三溪にとつての一大転機であった幕府致仕の時期や背景については、富村登氏によつて推測がなされているのみで、はっきりとした経緯は分かっていない。

富村氏は『常総の漢詩人』で次のように述べている。

さて將軍侍講の位地から降つて宗道村の一夫子にまで転落

した三溪、身上の変化の原因を「飯村丈三郎伝」は大政返還の結果だとしているが、私の考えは少し違う。維新史を見ると徳川家茂は慶応二年七月二十日上洛中、大坂城で死亡し（年二十一）越えて月の二十七日徳川慶喜が宗家相続と決定、二十九日に朝廷から慶喜の相続が許されたとある。三溪は其時直ちに侍講を辞し、不穏な天下の形勢を見て江戸がいやになり、徳川慶喜の將軍宣下以前に宗道退隱の決意をしたのではないかと思うのである。

日野龍夫「菊池三溪自筆詩文稿」は次のように述べて、富村氏の推測を支持する。

三溪は和歌山藩儒であつたが、家茂が紀州から入つて將軍職を継ぐや、拔きんでられて將軍侍講となつた。成島柳北との交友は、同じ任にある者同士としてこの時からのものであろうか。やがて辞職して采地の常陸国宗道村に退隱する。その時期を富村氏は、幕府の大政奉還時ではなく、慶応二年七月の徳川家茂の逝去の直後であろうと述べられたが、この推定は恐らく正鵠を得ている。12『東下録』は、元治元年、正月以来京にあつた家茂が五月に江戸へ帰つたため、従つて京にあつた三溪も東下した折の紀行で、大尾にいう、

甲子（元治元年）七月十七日暴雨昼暗。下毛兵起。胸次殊惡。謝官在近。

下毛の兵とは水戸天狗党の拳兵を指す。すなわち三溪には幕府瓦解以前から世の紛擾を厭う氣持が強かつたのである。

さらに小林勇「菊池三溪と『西京伝新記』」（新日本古典文学大系明治編一『開化風俗誌集』（岩波書店 二〇〇四）解説）も「慶応二年（一八六六）七月家茂が二十一歳の若さで大坂城中に没すると三溪は職を辞し、采地であつた下総国結城郡宗道村に退隱した」と、富村・日野両氏と同じ見解を示す。

すなわち慶応二年七月、紀州時代から仕えた將軍家茂が死去したことをきっかけに三溪は辞職した、という富村氏の推測が、ほぼ定説のように引き継がれてきているわけである。

しかし、結論から言えば、この説は誤りである。

では、三溪致仕の時期はいつなのか。そのことを考証するためにはまず『柳営補任』から関係記事を拾つてみる。

〔別巻・坤・小納戸〕

同日同備前守惣領同断

文久三亥八月九日小十人頭格奥儒者

菊池紀太郎
角石庵

※1 安政六未十二月十四日

※2 御小姓

※3 新規被召出

〔柳営補任之余・儒者〕

文久三亥八月九日御小納戸ヨリ、小十人頭格奥儒者
元治元子六月 日小十人頭

菊地角右衛門

〔卷之十四・小十人頭八番組〕

元治元子六月廿二日小十人頭格奥儒者ヨリ
同年八月十八日六番組江組替

菊地角右衛門

〔卷之十四・小十人頭六番組〕

元治元子八月十八日八番組ヨリ組替
同年九月晦日辞

菊地角右衛門

三溪が「紀太郎」または「角右衛門」と名乗ったことを示す史料はほかに見出せないが、『南紀徳川史』巻五十七（南紀徳川史刊行会 一九三二）には、

按するに 角右衛門元習の譜欠失詳ならず其子を角右衛門遷と称す；角右衛門遷御目付御用人御勘定奉行等に歴任禄四百石に至る嘉永安政の交土州大夫権勢盛なるの時大に用られ威権並ふ者なし安政五年六月 昭徳公大統領継承の時従て幕府に召され御小姓諸大夫となり備前守と称す其子純太郎亦学

あり江戸明教館の授読たりしか近世純と称し京摂の間に在りて文筆に従事すと云

とあり、三溪の祖父西臯、父梅軒が「角右衛門」と名乗っていたこと、梅軒が「備前守」と称していたことが分かる。『柳営補任』別巻・坤・小納戸の記事に見える「菊地紀太郎（角右衛門）」は「備前守惣領」とされており、三溪が祖父、父同様角右衛門を名乗ったと考えてよいようである。

さて、『柳営補任』の記述を整理すれば、三溪の幕臣としての履歴は以下のようなになる。

安政六年（一八五九）	十二月十四日	小納戸
文久三年（一八六三）	八月九日	奥儒者
元治元年（一八六四）	六月二十二日	小十人頭
同	九月晦日	辞職

つまり、三溪が幕府を辞したのは家茂が亡くなった慶応二年七月ではなかった。それに先立つこと約二年、元治元年六月に奥儒者の職を解かれ、致仕したのは同年九月のことであった。

三溪の致仕が元治元年であったことは、自筆稿本によっても確かめられる。

『晴雪楼詩鈔』（4・07／セ2、括弧内は京都大学付属図書館の請求記号。以下同じ）所収「晴雪楼詩存三稿」中の甲子すなわち

元治元年の作には、致仕後の心境を詠じたものが見られる。

(イ) 伝家有剣閑無用
昨日城中換犢来

伝家 剣有り 閑にして用無し
昨日 城中 犢に換へ来る

〔詠十二支〕(二)牛

(ロ) 少陵多病夙辭職
聖俞清貧最善詩

少陵 多病にして 夙に職を辭し
聖俞 清貧にして

最も詩を善くす

〔甲子歳晩〕

(ハ) 如今自笑蹇驢穩

如今 自ら笑ふ

蹇驢の穩かなるを

嘗向官途騎虎来

嘗て官途に向かひて

虎に騎りて来る

〔探梅〕

(イ) は漢の龔遂が渤海太守となったとき、民衆が農事に専念するよう、刀剣を売り牛を買わせたという故事(『漢書』循吏伝)を踏まえる。この詩で伝家の剣を売り、「犢」すなわち子牛を買った、というのは三溪が致仕したことを表している。(ロ) は官を辭し、清貧に甘んじながら詩人として生きようとする自らの姿を、杜甫や北宋の梅聖俞に擬えて描く。(ハ) では、いまや落魄

して驢馬に乗っている己の姿を、仕官していた頃の自分に引き比べ、自嘲気味に笑う。「騎虎」は奥儒者であった頃の意気軒昂さとともに、いったん始まった物事を中止できないたとえ「騎虎之勢」を踏まえて、官途の危うさをも表しているのであろう。

なお付言すれば、(イ) には、

三四、与古人「却将舊斬樓蘭劍、買了黄牛教子孫」全。亦勇退雅志、発為是語。

(三四、古人「却つて將に樓蘭の劍を舊斬せんとして、黄牛を買了して子孫に教ふ」と全じ。亦勇退の雅志、発して是の語と為る。)

(ロ) には、

騎虎恃勢、自以為安樂境界、何知一失脚、為千古懊恨。著一冷眼、便覺其可危可惧。

(虎に騎りて勢に恃み、自ら以て安樂境界と為すも、何ぞ知らんや 一たび失脚すれば、千古の懊恨と為るを。一冷眼を著し、便ち其の危ぶむべく惧るべきを覺る。)

という評語が、それぞれ朱で書き込まれている。「晴雪樓詩存三稿」の末尾にはやはり朱で「乙丑中秋 松園老人拝評」との識語が記されているから、慶應元年(一八六五)八月塩田松園によ

って書かれた評語なのであろう。元治元年の作である（イ）（ロ）に付されたこれらの評語に「勇退」「失脚」とあることも、三溪の致仕が元治元年であったことの傍証となろう。⁸⁾

日野龍夫氏が「三溪には幕府瓦解以前から世の紛擾を厭う気持が強かった」ことの証拠として引用していた『東下録』（585／ト1）巻末、元治元年七月十七日の日付を持つ識語に「謝官在近」とあるのも、二ヶ月後の致仕を指していると考えらることで、より自然に理解できる。

三

三溪の幕府致仕が元治元年（一八六四）九月であるとして、では、それはいかなる事情によるものであったのであろうか。

富村氏以下これまでの研究が慶応二年（一八六六）七月を辞職の時期としてきたのは、和歌山以来仕えてきた徳川家茂の死去という明確な動機が想定できなかったからなのであろう。しかしその推定が誤りであった以上、新たな理由が明らかにされねばならない。

三溪致仕の背景は、自筆稿本の一つである『晴雪楼文略』（405／セ4）所収「上閣老兼陸軍総裁松前侯書（閣老兼陸軍総裁松前侯に上る書）」に語られていた。

冒頭には「小十人頭、菊池純、謹再拝献書閣老兼陸軍全権松前侯閣下（小十人頭、菊池純、謹んで再拝し書を閣老兼陸軍全権松前侯閣下に献ず）」とある。先述の通り、三溪が「小十人頭」で

あったのは元治元年六月から九月の間。松前藩主松前崇広が老中格・海陸軍惣奉行となるのは同年七月。したがってこの上書が書かれたのは元治元年七月から九月の間ということになる。

上書はまず、国政を司る者にとつてそれぞれの人材の長所を活用することがいかに重要かを説いた後、自らの閱歴を述べてゆく。

純原紀国之世臣、至純身五世。皆起文儒、不時登庸、参与機務。迨今將軍自紀邸、入承大統、純父扈從、辱列朝班、充其侍御。純亦尋出身、補内廷官。自是厥後、公事軼掌、日在其左右。而將軍天資仁恕、愛及衆庶。夙知純顚愚不可用、無何充熙朝史譜編輯之員、置之其側、時臨而勞之。純窃感其知遇。拮据經年、已成而上之。尋遷内廷侍講、進班加秩。当是時、左右侍臣、皆匪暗胸武人、則衣纓子弟、絕無說書解文者。將軍英明、能洞知文武一途、不可偏廢、大開学院于内廷。身親臨之、鼓舞率先、日討論經史。於是内外百僚、絃誦為風、雖武人俗吏、咸知誦書講文。窃以謂、国家右文之化、坐可致也。既而大駕西上。再入觀京師。純亦辱扈從之末班。其在二条城、將軍發憤、講明斯學。自春至夏、凡一百余日間、弗以機務廢其業。駸駸乎其學大進焉。諸侯往往獻書籍、以佐其業者、步武相接也。豈得不謂曠代盛事乎哉。

（純原紀国の世臣にして、純の身に至るまで五世。皆文儒に起こり、不時登庸せられ、機務に参与す。今將軍紀

邸より、入りて大統を承くるに迫りて、純が父扈從し、辱くも朝班に列し、其の侍御に充てらる。純亦尋いで出身、内廷の官に補せらる。是より厥の後、公事鞅掌、日び其の左右に在り。而して將軍天資仁恕にして、愛衆庶に及ぶ。夙に純の懇愚用ふべからざるを知り、何くも無くして熙朝史譜編輯の員に充て、之を其の側に置き、時に臨みて之を勞す。純窃かに其の知遇に感ず。拮据經年、已に成りて之を上る。尋いで内廷侍講に遷り、班を進め秩を加へらる。是の時に当たり、左右の侍臣、皆暗胸の武人に匪ざれば、則ち衣纓の子弟にして、絶えて書を読み文を解する者無し。將軍英明、能く文武一途にして、偏廢すべからざるを洞知し、大いに学院を内廷に開く。身親ら之に臨み、鼓舞率先、日び經史を討論す。是に於いて内外百僚、絃誦風と爲り、武人俗吏と雖も、咸讀書講文を知る。窃かに以謂く、国家右文の化、坐して致すべしと。既にして大駕西上。再び京師に入覲す。純亦辱くも扈從の末班に廁はる。其の二条城に在るや、將軍発憤し、斯学を講明す。春より夏に至るまで、凡そ一百余日の間、機務を以て其の業を廢せず。駸駸乎として其の学大いに進めり。諸侯往々書籍を獻じ、以て其の業を佐くる者、歩武相接す。豈曠代の盛事と謂はざるを得んや。

和歌山藩から將軍職を継いだ家茂は、三溪の資質を見抜き、修史の役目を与えてくれた。また家茂は學問の重要性を理解し、自ら經史の講究に励んだ。文久三年（一八六三）二月から元治元年五月にかけての上洛の際にも、三溪は扈從の榮に浴した。己をよく知る好學の主君のもと、すべては順調であつた。しかし。

夫日月將明、則雲霧蔽之、花木將發、則風雨嫉之。將軍東下、權姦用事。群小俗吏、投其隙、搆陷其不便己者。凡其左右諸臣、忠直善良、關係文學者、鍛鍊羅織、擠而黜之。其與純同志者、罷官貶秩。或出之外職、或擯之散官、一挙掃蕩、不遺余力。純從浪華東下、以六月十五日、入江戸。抵品川駅、初聞知其近狀。自分其貶黜不遠。居三數日、果補今職。

（夫れ日月將に明らかならんとすれば、則ち雲霧之を蔽ひ、花木將に發かんとすれば、則ち風雨之を嫉む。將軍東下し、權姦事を用ふ。群小俗吏、其の隙に投じて、其の己に不便なる者を搆陷す。凡そ其の左右の諸臣にして、忠直善良、文學に關係する者は、鍛鍊羅織、擠して之を黜く。其の純と志を同じうする者、官を罷め秩を貶さる。或いは之を外職に出し、或いは之を散官に擯け、一挙掃蕩して、余力を遺さず。純浪華より東下し、六月十五日を以て、江戸に入る。品川駅に抵りて、初めて其の近狀を聞知す。自ら其の貶黜の遠からざるを分とす。居ること三數日にして、果して今の職に補せらる。）

あらず

將軍が京都から江戸へ下る前後、何らかの政治的陰謀によって、三溪と志を同じくする好學の士たちは、幕府中枢から一掃されてしまう。三溪自身もまた「今職」すなわち小十人頭に左遷された。

続けて三溪は言う。自分は同志たちが職と禄を奪われたのを見ながら、一人だけ官職にとどまることはできない。また、自分は儒者であつて、小十人頭のような武官として十分な働きをすることもできない。断然職を辞すべきであるが、それをためらうのは將軍が自分をよく理解し、登用してくれていたはずだからである。

夫將軍能知純。故用之其可用。閣下独不知純。故置之其不可置。純焉得不遠引而辭之乎哉。閣下果能知純者、則置之国校、命以督課後進之士。或參之史局、編輯国史実録。純雖無似、未必不奮一臂、以鳴国家盛事也。

（夫れ將軍能く純を知れり。故に之を其の用ふべきに用ふ。閣下独り純を知らず。故に之を其の置くべからざるに置く。純焉んぞ遠引して之を辭せざるを得んや。閣下果して能く純を知る者なれば、則ち之を国校に置き、命ずるに後進の士を督課するを以てせよ。或いは之を史局に參じ、国史実録を編輯せしめよ。純無似なりと雖も、未だ必しも一臂を奮ひ、以て国家の盛事を鳴らさずんば

松前公は幕政に参画するようになってまだ日が浅い、自分の資質を理解できていないのではないか。どうか父祖代々の儒者たる自分にふさわしい役職を与えてもらいたい。三溪はそう嘆願するが、その願ひは聞き届けられることなく、元治元年九月、やむなく辭職することとなる。

以上が三溪致仕の背景である。三溪が言う政変がいかなるものだったのか、現在のところ不明であるが、何らかの策謀に巻き込まれ、小十人頭に左遷された彼の無念と憤りは痛々しいほどに伝わってくる。

「左右の侍臣、皆暗胸の武人に匪ざれば、則ち衣纓の子弟にして、絶えて書を読み文を解する者無し」「權姦事を用ふ。群小俗吏、其の隙に投じて、其の己に不便なる者を構陷す」といった措辭は、上書としては激烈に過ぎると言つてよからう。さらに老中格・海陸軍惣奉行という要職にある松前崇広に対して、「閣下独り純を知らず。故に之を其の置くべからざるに置く」などと言ひ放つのは、あなたには為政者としての資質が欠けていると言ひに等しく、不敬と難じられる可能性すらあると思われる。しかし、当時の三溪の胸中はこのようなことでしか表現できないほど切実なものであつたのであろう。

以上これまで正面から取り上げられることがほとんどなかった

菊池三溪の伝記の一端、彼の人生における一大転機であつた幕府致仕の時期と背景について考証してきた。

三溪は元治元年（一八六四）六月、政変により奥儒者から小十人頭に左遷され、同年九月に官を辞した。

將軍侍講を務め、維新後文人として活躍したという点では共通する成島柳北に比べ、三溪の知名度が低いことについて、小林勇氏は次のように述べている。

ただ冒頭成島柳北の名を挙げたが、その交友圈にあつた文人たちの中で今日でも柳北の名がよく知られているのは、その詩文の才の特立によるものではなく、むしろその生き方――幕府瓦解後一貫して野にあり、反骨のジャーナリストとして新政府を批判し続けた、旧幕の遺臣としての生き方――によるものであるとすれば、逆に今日三溪の忘れられようとしている理由もそこに求められよう。維新後の彼の生き方は柳北や、あるいは大沼枕山などに比して微温的、現実的に過ぎるかもしれない。民間に講説していても権力に求められればためらいなくこれに応じている。富村氏の書にも彼が土浦藩から聘せられた時、直ちに承諾の旨を答えた挿話が見えるし、新政府の求めにも応じている。浪人儒者として生活していく上で

は当然のことであるが、柳北などの反骨精神に惹かれる人にとってはその生き方は魅力に乏しいものであらう。

小林氏の言うとおりであらう。しかし、柳北はいったん將軍侍講を免ぜられるも、すぐに歩兵頭並として復帰し、幕府が倒れるまで要職を歴任した。それ故にこそ柳北の幕府に対する忠誠と愛着は、新政府への批判・抵抗の基盤の一つとしてよく機能し得たのではないか。それに対し三溪は、同僚である幕臣の陰謀によって、いわば背中から撃たれるようにして幕府を去った人である。もとよりそのことできつぱり幕府に見切りを付けた、あるいは幕府を憎悪するようになったとは思わないが、自分は徳川の遺臣である、といった意識を人生の基調として明確に持ち得たとも考え難い。その意味で、単純に柳北と比較し、評価してしまうのは三溪に対して気の毒な気もする。

評価はやはり、三溪の伝記研究をさらに進め、その生涯と文業の全体像を明らかにした上で下さねばなるまい。そのために自筆稿本の精査と活用が必要かつ有効であること、本稿が示したとおりである。また、同時代の文人たちの詩文など、他の資料とも関わらせながら、当時の文人の交遊や文壇の状況を立体的に明らかにするという視点も重要である。

鵬外や荷風を惹きつけた三溪の魅力のほんの一部にも、我々はまだ出会えていないのかも知れないのである。

注

(1) 引用は『鵬外全集』第五卷(岩波書店 一九七二)による。

(2) 鵬外の旧蔵書は鵬外文庫として東京大学総合図書館に所蔵されている。同文庫には、いつ購入されたかは不明であるが、『晴雪樓詩鈔』『本朝虞初新誌』が共に入っている。

(3) 引用は『荷風全集』第一八卷(岩波書店 一九九四)による。

(4) 三溪について論じた先行研究を、本文中触れたものも含めて挙げておく。

富村登『常総の漢詩人』(富村登遺稿出版後援会 一九六五)

前田愛「明治初期文人の中国小説趣味」(言語と文芸)五一 一九六七・三、のち前田愛著作集第二卷

『近代読者の成立』(筑摩書房 一九八九)所収

日野龍夫「菊池三溪自筆詩文稿」(『国語国文』四六

一九 一九七七・九、のち日野龍夫著作集第三卷

『近世文学史』(ベリカン社 二〇〇五)所収

宮崎修多「漢訳文と明治の記事文」(『文学』増刊

『明治文学の雅と俗』(岩波書店 二〇〇一)

小林勇「菊池三溪と『西京伝新記』」(新日本古典文学大系明治編一『開化風俗誌集』(岩波書店 二〇〇

四) 解説

池澤一郎「『本朝虞初新誌』と講談」(新日本古典文学大系明治編三『漢文小説集』(岩波書店 二〇〇五)解説)

(5) 菊池左馬太郎については、三溪との続柄も含めて未詳とされてきたが、彼は三溪の養子であり、素空と号する日本画家であった。油井一人編『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社、一九九八)に拠れば、その略歴は以下の通り。

菊池素空「きくち・そくう」二八七三—一九二一

明治6年9月12日、京都に生まれる。本名左馬太郎。京都の詩人菊池三溪の養子となる。幸野樸嶺に師事、四条派を学ぶ。23年京都市画学校専門画科を卒業、一時上京するが、再び京都に戻り、浅井忠に日本画を教え、浅井に洋画を学ぶ。京都市立美術工芸学校の嘱託教諭や京都高等工芸学校の講師をつとめ、市立陶磁器試験場につとめる。36年浅井や神阪雪佳らと遊陶園を設立、42年にヨーロッパに視察旅行する。大正11年没。享年49。

(6) 三溪の没年月日とその場所については、これまで確たる根拠が示されてこなかったため、三溪死去を報じた明治二十四年十月二十五日付『読売新聞』の記事を引用しておく。

○菊池三溪翁易簀す 詩文双絶を以て天下に雄視し長く文壇の覇柄を把りたる三溪翁は先頃より中国北陸の間に客遊せられしと聞きつるが去る十七日若州小浜に於て脳溢血の爲めに溢焉長逝せられたり、先には枕山翁去つて白玉台上の人となり今又此翁の仙化を見る悲風慘雨何ぞ文墨場裏の寂寞なるや

(7) 引用は大日本近世史料所収本文による。ただし体裁は私に改めた。

(8) 自筆稿本『学聚堂遺稿』(4.05/カ3) 所収「松園塩田先生墓表」には「乙丑、余以病致仕、屏居于城北谷中村(乙丑、余病を以て致仕し、城北谷中村に屏居す)」とあり、これに拠れば三溪の致仕の時期は慶応元年(一八六五)であるとも考えられる。しかし、本文で挙げた資料によつて致仕が元治元年であつたことは十分論証できているのに対し、慶応元年致仕の根拠となり得る資料にはない。元治元年致仕を本稿の結論とした。「松園塩田先生墓表」の記述は、致仕後しばらくして谷中に転居した時期を示しているとしても解すべきであらうか。

(9) 自筆稿本『鉄屏書屋小稿』(4.03/テ1) にも「奉陸軍總裁兼閣老松前侯書」なる文章を取る。題下に「戊辰十月廿二日/夜五更脱草」とあり。『晴雪楼文略』所収「上閣老兼陸軍總裁松前侯書」より前の段階の草稿と思われる。本稿ではより整理・推敲された「上閣老兼陸軍総

裁松前侯書」を用いることとした。

(10) 松前崇広は文政十二年(一八二九)生まれ。洋式砲術を奨励するなど西洋通として知られる英明な君主であつた。将軍家茂の信任は厚く、松前という辺境の外様小藩の藩主としては異例の抜擢を受け、老中・海陸軍惣奉行などを務めた。慶応元年(一八六五)、勅許を得ることなく兵庫開港を決定、その責任を問われ、官位剥奪・国許謹慎を命じられた。翌慶応二年一月に帰国、同年四月、三十八歳で病没した。

『柳宮補任』には崇広が「海陸軍惣奉行」であつたことは記されているが、「陸軍總裁」なる職に就いていたという記事は見えない。『松前町史』史料編第一巻 第一印刷出版部 一九七四)に収める新田千里「松前家紀」(明治十一年(一八七八)脱稿)には慶応元年九月二十一日「海陸軍總裁二遷ル」とある。いずれにしても「上閣老兼陸軍總裁松前侯書」が書かれた時点では松前崇広は「陸軍總裁」ではない。恐らく後日推敲の過程で、最終的な職名を用いることにしたのであらう。

(11) 「菊池三溪と『西京伝新記』」

付記

○引用に際しては次の原則に拠つた。

一 漢字の字体は現在通行のものに改める。

二 ルビは省略する。

三 明らかな誤字・脱字は改める。

四 字配り・体裁については、読みやすさを優先し、必ずしも原本には従わない。

○本稿は第五十二回立命館大学日本文学会大会（平成二十年六月八日 於立命館大学末川記念会館）における研究発表をもとに執筆したものである。当日御教示賜った方々に感謝申し上げます。

（ふくい・たつひこ 本学講師）